

論文の和文要旨

論文題目

現代日本語の名詞述語文に関する一研究
— 〈「形容詞＋名詞」述語文〉の意味・機能—

氏 名

黄 允實 (ファン ユンシル)

本研究は、現代日本語における名詞述語文のうち、「形容詞＋名詞」述語文（述語構造が「形容詞＋名詞ダ」である文、たとえば「山田先生はやさしい人だ」）を主な対象とし、その特徴について記述したものである。

日本語の文の研究は全体としてかなりの蓄積があり、特に動詞述語文の研究は早くから進んできている。一方、名詞述語文においては多くの研究蓄積はあるものの、形容詞述語文と重なり合うところに注目した研究は少なく、まだまだ解明の余地があると思われる。また、今後の研究では両者の重なり合う部分だけでなく、両者間の相違点に注目することも重要であるように思われる。従来の研究では、このような両者間の類似点や相違点についてあまり重点をおいていなかったようにみうけられ、本研究では「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文、そして「形容詞＋モノダ／コトダ」文を総合的に考察することを試みた。研究方法としては、手作業や国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いた量的な考察と構文分析による質的な観点を取り入れ、言語事実に基づいて「形容詞＋名詞」述語文の特徴を明らかにすることを目的としている。

本研究は、第Ⅰ部序論、第Ⅱ部（本論Ⅰ）、第Ⅲ部（本論Ⅱ）、第Ⅳ部結論の４部構成となっている。第Ⅰ部は序論であり、第１章と第２章がこれに当たる。第１章では、本研究の目的、そして考察の対象および言語資料について述べ、第２章では本研究にかかわる先行研究全般を概観した。

本論は第Ⅱ部（本論Ⅰ）と第Ⅲ部（本論Ⅱ）の２部構成となる。第Ⅱ部は第３章～第６章からなり、第Ⅲ部は第７章のみからなる。第Ⅱ部は「形容詞＋名詞」述語文の性質について考察したもので、第Ⅲ部ではいわゆる形式名詞と呼ばれる「もの」と「こと」が述語名詞になっている文、「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文を取り上げ、述語名詞とモーダルな形式との連続性に注目して考察した。

最後に、第Ⅳ部結論では、本研究の考察を通して明らかになったことや本研究の意義、そして今後の課題について述べた。以下、本論の各章に沿って研究内容の要約を示す。

〔本論Ⅰ〕〈「形容詞＋名詞」述語文〉の性質

第Ⅱ部（本論Ⅰ）の議論を進めるにあたっては、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共通点と相違点に着目し、かつ、「形容詞＋名詞」述語文の述語構造の特徴にも注目し、実例に基づいて「形容詞＋名詞」述語文の性質を考察した。

第3章では、本研究の議論を進める上で基本となる「形容詞＋名詞」述語文について、主語名詞の分類（個別・具体的なものを指すか、一般・総称的なものを指すか）、主語名詞と述語名詞との関係、「形容詞＋名詞」述語と形容詞述語との意味上の異同等を観察し、考察対象の範囲を明確にした。

第4章では、文中における主語の示し方に着目し、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文を比較考察した。「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は、いずれも主語が「は」で示されることが他の形式に比べて相対的に多い。但し、「「は」で示されるもの」としてまとめた3つのタイプ、すなわち主語を「は」、「というのは」類、「とは」という3タイプのマーカーで表示する例は、「形容詞＋名詞」述語文では71%なのに対し、形容詞述語文のほうはそれが半数以下（47.2%）である。形容詞述語文は、そのかわり無助詞（「ご主人、ハンサムね」）が約4分の1（25.4%）、「って」（「世の中って理不尽だなあ」）が14.2%を占めるなど、全体として「形容詞＋名詞」述語文よりも主語の示し方のバリエーションが豊かだと言える。また、二つの構文は主語名詞が個別・具体的なもののか、あるいは一般・総称的なものかという性質によっても、主語の示し方に違いがみられる。個別・具体的なものの場合には、「形容詞＋名詞」述語文では4分の3近くが「は」で提示されているのに対して、形容詞述語文では「は」（45.6%）のほかに「無助詞」（32.3%）で提示される割合が高い。一方、一般・総称的なものの場合には、「形容詞＋名詞」述語文では「は」（41.7%）のほかに「というのは」類と「とは」で提示される割合が高い（31.3%）のに対して、形容詞述語文では「は」（44.2%）のほかに「って」（34.8%）で提示される割合が高い。

第5章では、「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の共起成分に注目し、主語名詞の表す事物の〈特性〉の恒常性と一時性という観点から比較考察した。「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文は程度副詞、比較表現Ⅰ（他の事物との比較）による修飾において共通点がみられており、これは両者が形容詞を含む構文であるという特徴を反映するものである。しかし、二つの構文は一方は述語に名詞を含んでいるが、他方は含んでいないという構文的な違いがあり、このような特徴は恒常的な特性を表すか一時的な現象を表すかという意味機能の違いに現れている。つまり、形容詞述語文は恒常的な特性（「山田先生はやさしい」）を述べることができるのはもちろん、一時的な事態（「最近、なんだか無口ね」）も述べることもできるのに対して、「形容詞＋名詞」述語文は恒常的な特性（「山田先生はやさしい人だ」）だけを述べることができ、一時的な事態を述べることはできない（?「最近、無口な人ね」）という性質である。

第6章では「形容詞＋名詞」述語文のさらなる考察として、動詞句と形容詞句が連体句

をなしている「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文（「仕事ができる素晴らしい人だ」）を対象に、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文（「若いやせた女性だ」）と比較考察した。用例数からみると、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文が圧倒的に多い（95.5%）のに対して、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文は極めて少なく（4.5%）、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文を中心に、動詞句と形容詞句（複合連体句（下線部））の結びつきの意味的なあり方について述べた。

動詞句と形容詞句の意味関係をみると、属性の同質な側面を述べるものが異質な側面を述べるものより多くみられる。属性の同質な側面を述べる場合、「動詞句＋形容詞句＋名詞ダ」型の文では動詞句が個別かつ具体的な属性の側面を述べ、それを形容詞句によって一般化・評価づけしてあらためて示す（「すきま風の吹き抜ける古い家だ」）ことが多いのに対して、「形容詞句＋動詞句＋名詞ダ」型の文ではそういうむすびつきがほとんどみられない。このような表現のし方は「動詞句＋形容詞句」の意味的なあり方を示していると思われる。

【本論Ⅱ】「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文—述語名詞からモーダルな形式へ—

第Ⅲ部（本論Ⅱ）では、「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文において特性の持ち主がどう提示されるかに着目し、そのさまざまな具体的な形式が典型的な述語名詞としての「もの」「こと」からモーダルな意味を表す「ものだ」「ことだ」までのさまざまとかわっていることを示そうとした。

文の構造の観点からみると、「もの」「こと」が典型的に述語名詞としてふるまう文のタイプ（「N ハ Adj モノダ／コトダ」）と典型的にモーダルな意味を表すと言える文のタイプ（「Adj モノダ／コトダ」「節＋モノダ／コトダ」）があり、その中間にはさらにさまざまな文のタイプが混在している。その中間的なタイプにおいては、いずれも特性の持ち主を名詞ではなく句や節で表す文のタイプであるほど、「ものだ」「ことだ」がモーダルな形式に近くなる。本来モーダルな意味というのは事柄に対する話し手の態度を示すものであり、それが文の形の中に反映されていると言えそうである。

以上、本研究の全体を通してみると、大きく二つに分かれる。

一つは、第Ⅱ部（本論Ⅰ）で行った「形容詞＋名詞」述語文の性質に関する研究である。「形容詞＋名詞」述語文と形容詞述語文の類似点や相違点、そして「形容詞＋名詞」述語文の内部の連体句の意味的なあり方に注目した。もう一つは、述語名詞からモーダルな形式への連続性に焦点を当てた第Ⅲ部（本論Ⅱ）の「形容詞＋モノダ」文と「形容詞＋コトダ」文に関する研究である。本研究のこのような「形容詞＋名詞」述語文の性質の解明や「形容詞＋モノダ／コトダ」文の総合的な考察への試みは、従来の研究とは異なった新しい視点から行われたものであり、今後の名詞述語文の研究に一助となるものと考えられる。